【原著】

鹿児島大学医学雑誌　2023年4月
Med. J. Kagoshima Univ., April, 2023

公認心理師科目「心理実習」受講学部生の医療領域実習における学び体験の質的検討 －大学病院精神科実習を通じて－

上村佳代[1)]，飯田昌子[2)]，平田祐太朗[2)]，中村雅之[1)]

1）鹿児島大学大学院医歯学総合研究科　精神機能病学分野，2）鹿児島大学法文教育学域法文学系

A qualitative study on learning experiences of undergraduate students in medical field practice in the certified public psychologist course “practical training in psychology” : Through the practicum in the Psychiatry Department of the University Hospital

Kayo KAMIMURA[1)], Masako IIDA[2)], Yutaro HIRATA[2)], Masayuki NAKAMURA[1)]

1)Department of Psychiatry, Kagoshima University Graduate School of Medical and Dental Sciences
2)Research Field in Law, Economics and the Humanities, Education, Law, Economics and the Humanities Area, Kagoshima University
（Received 9 September 2022; Revised 20 November 2022; Accepted 22 February 2023）

＊Address to correspondence
Kayo KAMIMURA
Department of Psychiatry,
Kagoshima University Graduate School of Medical and Dental Sciences
8-35-1 Sakuragaoka, Kagoshima Japan , 890-8520
phone: +81-99-275-5346
e-mail:ka-kami@m2.kufm.kagoshima-u.ac.jp

Abstract

Aim: To clarify the kind of learning experiences obtained by the undergraduate trainees in the Certified Public Psychologist training program during their off-campus trips to medical facilities.
Methods: Focus group interviews（FGI）were conducted with 19 undergraduate Certified Public Psychologist trainees who spent one week in a psychiatry department of a university hospital. The results were analyzed using the grounded theory approach（GTA）.
Results: FGI and subsequent GTA generated five category groups, 15 categories, and 41 subcategories. The trainees began with a “knowledge and image as a non-professional prior to the off-campus trips” as the trainees had a non-professional image of the medical field and psychiatry based on their personal experiences, and/or had a negative image of psychiatry. Through the off-campus observations, the trainees underwent many "learning experiences with a sense of

reality." By comparing the differences between their pre-experience image of the medical field with their observations of the various occupations working in the medical field and multidisciplinary cooperation, the trainees experienced a "deepening of images through observation practice." At the same time, they were able to reflect and develop a concrete image of their own work as psychologists ("deepening and development of self-understanding"). Lastly, they were exposed to actual workplace experience and gained concrete improvements in their motivation for practical training.
Conclusion: Our findings suggest that off-campus trips to medical facilities play an important role in promoting self-understanding and professional identity for undergraduate trainees who aspire to become psychologists.

Key words: certified public psychologists, clinical practice, qualitative analysis, career development process, undergraduate

抄録

緒言：心理職の養成課程において，臨床実習は非常に重要な要素である．公認心理師養成課程における実習は，大学院では実践的な内容を含むことが規定されているが，学部においては主として「見学等による実習」を行うことが定められている．
目的：公認心理師養成課程における学部実習生が，医療領域における見学実習においてどのような学び体験を得ているかを明らかにする．
方法：大学病院で1週間の見学実習を行った公認心理師養成課程の学部実習生19名を対象に，フォーカス・グループ・インタビュー（Focus Group Interview: FGI）を実施し，グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach: GTA）を用いて分析を行った．
結果：FGIと，引き続き施行したGTAの結果，5つのカテゴリー・グループ（Category Groups: CG），15のカテゴリー，41の下位カテゴリーが生成された．5つのCGはそれぞれ「見学実習前の非専門家としての知識やイメージ」,「実感を伴う学び体験」,「見学実習によるイメージの深まり」,「自己理解の深化と発展」,「実習への具体的な意欲向上」であった．学部実習生の見学実習前の医療領域に対する知識やイメージは，概ね自身の経験に基づいた非専門家的なものであった（「見学実習前の非専門家としての知識やイメージ」）．見学実習が始まると，医療領域や精神科医療，各職種の業務や連携の実際の見学を通じて医療現場のリアリティを体感したり，事前のイメージと現実との差を実感したりするなど，多くの「実感を伴う学び体験」を得ていた．また，学部実習生は見学実習を通じて「見学実習によるイメージの深まり」を体験していた．すなわち，学部実習生には医療領域や精神科医療，各職種の業務や連携に対する理解の深まりやイメージの具体化が生じており，さらに精神科医療に対する偏見も低減していた．それに加えて，学部実習生は見学実習を契機に自分自身についても内省を深め，職業的アイデンティティの模索を開始するなど「自己理解の深化と発展」といえる変化も生じていた．さらに，学部実習生は実際の現場に入って学ぶことの意義を実感し「実習への具体的な意欲向上」も見られた．
結論：見学実習は実践的な内容を伴うものではないが，心理職を志す学部実習生にとって，職業発達を促進する重要な役割を担っていることが示された．公認心理師養成課程における学部の実習においては，学部実習生が見学体験を踏まえて自己理解を深められるよう，実習担当教員及び実習指導者がサポートすることが有用と思われた．また，見学内容の理解だけでなく自己理解の深化が生じているかどうかという点は，学部実習生の達成状況や課題を評価する際にも有用な視点になると思われた．

緒言

心理職の養成課程において，臨床実習は非常に重要な要素である．公益財団法人臨床心理士資格認定協会が認定する臨床心理士資格の養成課程では，大学院においてのみ臨床実習が必須であったが，2017 年に誕生した国家資格である公認心理師の養成課程では学部においても 80 時間以上の「見学等による実習」を行うことが定められている．「保健医療，福祉，教育，司法･犯罪，産業･労働」の 5 分野において学外施設での「見学等による実習」が定められているが，当面は医療領域のみが必須とされており，とりわけ医療領域における実習は重要視されている．

今まで行われてきた心理職養成における実習に関する調査や研究のほとんどは，大学院における実習が対象であった[1–3]．学部での実習に関しては，臨床心理士課程でも独自に実践してきた大学は多くあった[4]ものの，これまでの調査や研究は概ね頻度や時間数の報告といった実態調査にとどまっている[5]．また，松原[6]は，臨床

心理士養成課程における学部での実習体験について実習生の発表資料を分析し，成長要因を「知識的成長要因・社会的成長要因・臨床感性的成長要因・心理的成長要因」の４つに分類しているが，公認心理師養成課程における医療領域の「見学等による実習」を通じての学部実習生の学び体験については，まだ十分に検討されていない．

公認心理師養成課程における学部での実習においては，臨床活動は基本的には想定されておらず[7]，「領域共通の知識・態度に関して，支援現場において体験的に学習する機会」[8]と捉えられており，大学院のように実際の支援を通じて体験される学びとは異なっていると思われる．また，習得すべき事項として「心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ」，「多職種連携及び地域連携」，「公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解」の３項目が掲げられ，心理職としての実践的技術というよりも連携や倫理についての学びを現場の見学によって深めることが重視されていることから，従前より行われている臨床心理士養成課程における実習で学部生が得る学びとも異なっていることが予想される．

本研究では，公認心理師養成課程でも特に重要視されている医療領域での「見学等による実習」に焦点を当て，学部生が医療領域における「見学等による実習」を通じてどのような学び体験を得ているのかを明らかにすることを目的とする．公認心理師養成課程の学部生が医療領域において「見学等による実習」を行うことの意義や学部実習生への影響を明らかにすることにより，医療領域における公認心理師実習の評価に際しての指標の仮説を得ることができ，学部実習生の実習目標に対する達成状況や課題を明らかにすることにつながる．また，医療領域において求められる心理職のコンピテンシーや職業発達段階の明確化にもつながると思われる．加えて，実習担当教員や実習指導者にとっては，指導・支援にあたって学部実習生の達成状況や課題を評価するための重要な視点を，当事者である学部実習生の声をもとに具体的に示すことができる．教育の受け手である学部実習生の実際の考えや意見を土台にすることで，実習担当教員及び実習指導者の経験則だけではなくエビデンスに基づいた当事者視点の実習プログラム作成や，今後の実習前の事前学習や実習後の教育に対しても示唆を与えることができ，公認心理師養成カリキュラム全体への寄与を通じて心理に関する支援を要する者への適切なアプローチができる心理職の養成につながることが期待できる．

対象と方法

１．対象

X年にA大学公認心理師養成課程の「心理実習」（以下，「心理実習」）を受講し，B大学病院精神科における見学実習（以下，「見学実習」）に参加した学部３年生及び４年生，計19名（男性１名，女性18名）を対象とした．

２．「心理実習」と「見学実習」について

(1)「心理実習」の目的と到達目標

A大学における「心理実習」の目的は，①心理職の関連する施設見学や体験，専門職者の講話を通じて，施設の特徴・専門職の役割・対象者の多様な生活の場を理解すること，②事前学習において習得した各領域で求められる基本的な知識や態度等を学外実習において実践的に学び，事後学習における振り返りで自分自身の今後の課題を見いだすことであった．到達目標は，①対象者に応じた施設の特徴を挙げることができる，②心理に関する支援を要する者へのチームアプローチについて説明することができる，③多職種連携および地域連携について説明することが出来る，④対象者，他職種とのコミュニケーションを通じて，良好なコミュニケーションについて説明することができる，⑤心理職（公認心理師等）としての職業倫理及び法的義務について説明することができる，であった．

(2)「心理実習」のカリキュラム

A大学における「心理実習」は，学内実習（事前事後指導26時間），学外実習（54時間）の80時間で構成されている．学外実習の内訳は，保健医療分野で38時間，福祉分野で10時間，司法・犯罪分野で２時間，教育分野で４時間であった．

(3)「見学実習」のプログラム

B大学病院精神科における見学実習プログラムは，心理職業務，精神科業務及び他職種連携の見学で構成された（表１）．

心理職業務については，面接室の見学及び業務に関する講義が行われた．心理職が利用している面接室が狭小なため，見学者の存在が患者の心理検査や心理面接の結果に大きな影響を与えることから，本プログラムには心理検査や心理面接の陪席は含まれなかった．精神科業務については，外来診療の陪席，病棟回診の見学，多職種カンファレンスへの参加，精神科看護師による病棟レクレーションの見学が実施された．他職種連携については，上記の多職種カンファレンスに加え，精神保健福祉士の業務に関する講義が行われた．

実習参加形態は４名～５名で１つのグループを作り，実習期間は各グループ１週間（30時間）であった．グループ内で見学内容を共有し学びを深めるため，講義や陪席，見学が1つ終わるたびにグループ全

表 1．The program of the off-campus trip in a psychiatry department of the B university hospital

1日目	オリエンテーション，臨床心理室見学，心理職講義，精神科病棟レクレーション見学
2日目	精神科外来診療見学，臨床心理室見学，心理職講義
3日目	精神科多職種カンファレンス見学，精神科病棟回診見学，臨床心理室見学，精神保健福祉士講義
4日目	精神科外来診療見学，臨床心理室見学，心理職講義，精神保健福祉士講義
5日目	精神科外来診療見学，臨床心理室見学，心理職講義，実習のまとめ，FGI実施

員で実習体験を発表し，実習指導者を交えてディスカッションを行った．

なお，第一著者及び第四著者は，B大学病院精神科において実習指導者を担っている．また，第一著者は精神科に所属しているが，大学病院においては独立部署である臨床心理室で心理職として業務にあたっている．

3．インタビュー方法

大学病院の精神科における見学実習という機会を学部実習生がどのように捉え体験しているか，その内面のプロセスを明らかにするという目的のため，質的研究法を用いた．調査方法としてフォーカス・グループ・インタビュー（Focus Group Interview: FGI）を採用した．FGIは，参加者間の相互作用を促進し，より深みと広がりのある情報を得ることができるインタビュー手法の一つであり[9]，医学教育においても教育の質を高めることを目的とした調査研究に用いられてきている[10]．

１週間の見学実習プログラムの最終日に，第一著者がインタビュアー及び記録者となり，１回60～90分程度のFGIを実施した．19名は１つのグループにつき４名ないし５名として，４グループに編成された．全員が同じ学部の学部生であり，名簿順に各グループに割り振られた．２グループは大学３年生，２グループは大学４年生であった（表２）．また，学部実習生は実習開始時には精神医学に関する講義の受講経験が全くなかったが，大学４年生は大学院入試の準備のために精神医学領域についても独学で学んでいた．したがって，大学3年生は精神医学的な知識が非常に乏しい状態であったが，大学4年生は精神医学的な知識を多少有した状態であった．

インタビューにおける質問項目は，①実習の中で知ったこと・印象に残ったこと，②実習を通じてイメージがどのように変わったか（病院・精神科・心理師・他職種・連携），③これから身につけたい知識・スキル，の3点であり，これらについてオープン・クエスチョンで尋ね，発言したい人が自由に語る形式をとった．

なお，本研究は生命科学・医学研究とは異なり，指針適用外に該当するため倫理審査委員会の承認は受けていないが，倫理的配慮として，調査目的及び配慮事項（同意の有無は実習の成績に一切影響しないこと，分析に際しては個人が特定されないよう配慮すること，同意はインタビュー終了後も撤回できること）について，書面を用いて十分に時間をとって説明し，録音に関する同意も書面で得た上で実施した．事後に質問や同意の撤回希望が生じる可能性を考慮し，第一著者の連絡先を全員に書面で配布した．語りはすべて逐語化し，同意の得られたデータのみを分析対象とし，全て匿名化することによって個人が特定されることのないよう注意を払った．逐語記録は全て録音ならびに第一著者の記録と照合して確認した．

4．分析方法

分析には，質的研究方法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach: GTA）を用いた．本手法は，医学領域でも近年看護研究等で頻繁に用いられている[11]．具体的な手順は戈木[12]に基づき，以下のように行なった．

（1）切片化：逐語記録から実習体験に関するデータ

表 2．Features of each group in focus group interviews

グループ	グループ構成員の特性	インタビューデータの特徴	グループの特徴
1	３年生（女性４名）	発話データが最も少ない	精神医学的知識がほとんどない
2	４年生（女性５名）	４年生のうち発話データが少ない	精神医学的知識を多少有している
3	４年生（男性１名，女性４名）	発話データが最も多い	精神医学的知識を多少有している
4	３年生（女性５名）	発話データが平均的	精神医学的知識がほとんどない

を内容毎に区切り「切片」とした.

(2) コード化：切片化されたデータ一つ一つに対し，意味内容を的確に表すラベルを付し，コードを作成した.

(3) カテゴリー生成：

ステップ１：たたき台となるカテゴリーの生成を目的に，インタビューの発話データが最も少ないグループ１を選択した．その後，コードをカテゴリーにまとめ，下位カテゴリーおよびカテゴリーを抽出した.

ステップ２：カテゴリーの拡充と洗練を目的に，４年生のうちインタビューの発話データの少ないグループ２のデータを追加し，15の下位カテゴリーが追加された．更に，インタビューの発話データが最も多いグループ３のデータを追加し，１つの下位カテゴリーが追加された．得られたカテゴリーをさらに内容的に共通の上位概念に統合し，カテゴリーグループ（Category Groups: CG）とし，CGやカテゴリー，下位カテゴリーを更に洗練させた.

ステップ３：カテゴリーの妥当性を確認することを目的に，データの量が平均的であったグループ４のデータを追加した．データは全てステップ２までのカテゴリーで分類され，カテゴリー変更の必要性は認められなかった．カテゴリーをさらに統廃合し，最終的に５つのCG，15のカテゴリー，41の下位カテゴリーが生成された.

(4) モデル生成：生成されたCGをもとに，山本[13]や平田[14]の手順にならいKJ法A型[15]を用いてカテゴリー同士の関係性を仮説的に示すモデルを作成した．なお，分析の妥当性を担保するため，データの分析や検討においてはKJ法やGTA等を用いた研究歴を持つ研究者２名（いずれも臨床心理士かつ公認心理師）と共に行い，第一著者個人による恣意的な分析に陥る危険性の軽減に努めた．判断について意見の不一致があった場合は繰り返し協議を行い，最終的には合議にて決定した.

結果

得られた結果を表3に示す．以下，本文中ではCG，カテゴリー，下位カテゴリーに分けて説明する．なお，CGは【】，カテゴリーは『』，下位カテゴリーは「」，データは“”として示す.

１．【見学実習前の非専門家としての知識やイメージ】

このCGは見学実習前の学部実習生の知識やイメージを表す．【見学実習前の非専門家としての知識やイメージ】に含まれるカテゴリーは，『医療領域に対する表面的なイメージ』，『精神科医療へのネガティブなイメージ』，『各職種と連携への表面的なイメージ』であった．学部実習生は必ずしも医療領域を志望しておらず，医療領域や精神科医療に関する知識やイメージは概ね自身の経験に基づいた非専門家的なものであった．また，精神科医療に対しては“暗い（回答者 A）”，“怖い（回答者 B）”，“刑務所みたい（回答者 C）”，“行くのにものすごい抵抗がある（回答者 D）”といったネガティブなイメージを抱いてもいた．各職種や連携に対する理解もステレオタイプ的であり，心理職の職務内容についても“主にカウンセリングをして，支援をしていく（回答者 D）”など表面的な理解に留まっていた.

２．【実感を伴う学び体験】

このCGは学部実習生が見学実習で得た体験の内容を表す．【実感を伴う学び体験】に含まれるカテゴリーは，『精神科医療のリアリティの実感』，『驚きを伴う精神科の見学体験』，『各職種の職務と連携に対する具体的実感』であった．見学実習の中で医療領域や各職種の具体的な仕事内容について知識を得ることに加え，精神科的疾患が“本当にあるんだ（回答者 E）”と実感したり，病棟が“思ったより明るい（回答者 F）”ことや精神科患者が“全然会話ができる（回答者 E）”ことに驚きを感じたりするなど，医療現場のリアリティを体感し，それぞれの職種について多くの具体的な実感を得ていることが示された.

３．【見学実習によるイメージの深まり】と【自己理解の深化と発展】

これらのCGはどちらも，見学実習により学部実習生に生じた変化を表す．【見学実習によるイメージの深まり】に含まれるカテゴリーは，『医療領域，精神科医療への理解の深まり』，『心理職への理解の深まり』，『各職種へのイメージの膨らみ』，『連携のイメージの具体化と理解の深まり』であった．見学実習を通じて学部実習生には，医療領域，精神科医療，各

表３．Generated category groups, categories, subcategories and specific examples of statements

CG	カテゴリー	下位カテゴリー	発言の具体例
見学実習前の非専門家としての知識やイメージ	医療領域に対する表面的な知識やイメージ	医療への関心の薄さ	″医療領域にそこまで関心っていうのがあんまりなかった″
		自身の経験に基づく病院のイメージ	″患者さんが診察に来たり入退院する場所みたいな感じ″
		精神科に関する一般的なイメージ	″精神科っていうと，やっぱり精神にアプローチするものだと思ってた″
		医療領域の心理職に関する知識の乏しさの自覚	″（心理職が）お医者さんの依頼を受けて行うという点があんまり知らなかった″
	精神科医療へのネガティブなイメージ	暗く閉鎖的な精神科のイメージ	″精神科って聞いたら，ほんとに暗い，怖いとか″ ″鉄格子があってとか，刑務所みたいなイメージが強かった″
		精神科への否定的態度	″行くのにもすごい抵抗があるようなイメージだった″
	各職種と連携への表面的なイメージ	冷徹な精神科医師というイメージ	″すごく冷静そう″ ″厳しそう″
		優しく忙しい精神科看護師のイメージ	″優しくて温かみのあるイメージ″ ″すごいテキパキされてるイメージ″
		事務職のようなMSWの漠然としたイメージ	″具体的に思い浮かばなかった″ ″こういう支援が受けれるよみたいなシステムを紹介する職業″ ″事務作業みたいなイメージが結構強かった″
		カウンセリングを行うフレンドリーな心理職という漠然としたイメージ	″具体的な何をするっていうイメージがなくて″ ″主にカウンセリングをして，支援をしていくっていうのが心理士のイメージ″ ″患者さんとの距離感もお医者さんとかに比べてもすごいフレンドリーで明るくて″
		連携の具体的イメージのわかなさ	″漠然としたイメージしかなかった″ ″話し合ったりするんだろうなぐらいしか思えてなかった″
実感を伴う学び体験	精神科医療のリアリティの実感	精神科疾患の具体的な実感	″初めて実際に患者さんを見て″ ″統合失調症とか，摂食障害とか，本当にあるんだなーと思いました″
		精神科病棟ならではの特徴への気づき	″鍵がかかっている″ ″テーブルの角が軟らかかったりとか，カーテンレールが外れるようになってたりとか，さまざまな工夫がされてる″
		精神科医療の対象の広さへの驚き	″対象が結構広いんだなっていうのが印象的でした″ ″精神科リエゾンで，自分が思っていた精神科の患者さんと結構違うというか″
	驚きを伴う精神科の見学体験	精神科病棟の明るさへの驚き	″雰囲気は思ったより明るくて″ ″すごい印象的でした″
		精神科の普通さの実感	″普外来の待合室とか診察室も，普通に私たちが風邪とかで行くような病院とそんなに変わった様子がなくて″ ″（患者さんは）全然会話ができる″
	各職種の職務と連携に対する具体的実感	精神科医師の細やかな診察の実感	″想像以上に細かいところまで時間をかけて話を聞くんだなって″ ″患者さんの意見をじっくり，患者さんのペースに合わせて聞いて，優しく声掛けしていた″
		精神科看護師の大変さの実感	″一度にいろんなことをこなさなきゃいけないので大変そうだなって，改めて思いました″
		実際に患者と接するMSWへの驚き	″ただ手続きを行うだけじゃなくて″ ″実際に患者さんの状態を見て，その患者さんに合った支援とかを考えている″
		心理査定業務の具体的な実感	″すごい量の心理検査の道具とか紙がいっぱい置いてあった″ ″（患者さんと）ちゃんとした距離感を保って接してる″
		予想以上に多い連携への驚き	″あれだけ多くの人が話し合って一人の患者さんに時間を割いてるんだなっていうところまでは知らなかった″
見学実習によるイメージの深まり	医療領域，精神科医療への理解の深まり	役割分担で成り立つ病院への理解	″役割をちゃんと分担して，いろんな職種の方が協力して，病院って成り立ってるんだな″
		精神科への偏見の低減	″精神科も他の科と同様に，患者さんの抱える問題を改善しようとか，治療しようという点においては同じなんだと思って″ ″近寄り難いイメージっていうのが結構なくなった″
	心理職への理解の深まり	領域による心理職業務の特色の理解	″病院の特徴によっても，心理職の担う役割っていうのはカウンセリングが中心だったり，検査が中心だったりっていうので，変わる″
		心理査定に関する理解の深まり	″検査結果をどのように生かすか，いろんなことを考えて，ただ点数を出すだけじゃない″ ″（患者さんの）状態も把握して検査を選ばないといけない″
	各職種へのイメージの膨らみ	精神科医師の人間味と頼りがいの実感	″冷静さに加えて，口調とかに優しさとか温かさがあった″ ″とても頼りがいがある″ ″知識がほんとに幅広い″
		精神科看護師のイメージの深まり	″裏ではとても忙しくて″
		MSWの重要性の実感	″イメージが結構変わった″ ″外と病院とをつないでいたりとか，患者さんのその後の生活とかに直接関わる支援をしたりとか″
	連携のイメージの具体化と理解の深まり	連携の重要性と難しさの実感	″ほんとに幅広く，さまざまな分野の職業との連携って必要なんだ″ ″秘密保持の話とかも，明確な線引きがないのですごい難しいなと感じた″
		他職種理解の必要性の理解	″他の職種の方々の仕事内容とか，考え方を知らないと，尊重もできない″
自己理解の深化と発展	自己内省	自分に必要な知識やスキルへの気づき	″知識が，すごく自分が浅いっていうことにも気付いて，勉強不足だった″ ″自分と患者さんの間に一線を保ちながら接していくっていうスキルも大事″
		自身の持つ偏見への気づき	″やっぱちょっと偏見が自分の中にもあったのかな″
	職業的アイデンティティの模索	心理職としての具体的展望	″実際に心理士になった立場で話すときに″ ″自分がもし検査をする側になったら″
		心理職のアイデンティティの揺らぎ	″お医者さんとか看護師さんとかソーシャルワーカーさんも，自然とそれ（傾聴，共感）ができてて″ ″臨床心理士とちょっと似通っているところがある″ ″自分の専門性っていうのは何なのかっていうのを考えないと″
	開放性とモチベーション	モチベーションの高まり	″自分が学習してきたことがちゃんと，こういう場で使われているっていう姿を実際に見て，もっと勉強しようかなって思いました″ ″知識の幅を広げたい″
		興味関心の広がり	″病院で働くこともすごい興味が湧いた″ ″もっと広い分野っていうか，領域にも目を向けていかないと″
実習への具体的な意欲向上	実習体験の肯定的な意味づけ	実際の現場に入り学ぶことの意味の気づき	″言葉とか単語とかで知識だけを知ってて，それでほんとに理解した気になってた部分がたぶんあると思った″ ″見てみないと，やっぱり自分がどういう心理士になりたいとか，どういう仕事したいっていうのも考えがそこまで及ばない″
		見学実習への満足感	″この実習の内容はどれもすごく勉強になった″
	より良い実習への思い	心理面接見学への強い要望	″検査とか，面接をちょっとワンウェイミラー越しとかでも見れたら″
		実習に必要なレディネスへの要望	″医学的なほうの知識があったほうが，やっぱり回診とか分かりやすいんじゃないか″ ″病院で働く心理職について知っとかなきゃいけない″
		実習中の困りごと	″緊張プラス慣れなさで，結構身体的にも体力的にもきつい″

職種，そして多職種連携に対する理解の深まりとイメージの具体化が生じていた．また，精神科医療に対する偏見が低減したことも示された．

【自己理解の深化と発展】に含まれるカテゴリーは，『自己内省』，『職業的アイデンティティの模索』，『開放性とモチベーション』であった．『自己内省』は，自分の知識やスキルの不足への気づき，そして“偏見が自分の中にもあった（回答者 E）”といった内なる偏見への気づきを表す．『職業的アイデンティティの模索』は，“自分がもし検査をする側になったら（回答者 F）”のように自分が心理職として働くイメージを具体的に描くことに加え，それまで持っていた心理職イメージに揺らぎが生じることや，疑問や悩みに対し自分なりに考えようとする姿勢を含む．特に心理職の仕事を「話を聴く」と捉えていた学部実習生は，他職種と心理職の仕事内容の重なりに気づき“ちょっと似通っているところがある（回答者 G）”ことに当惑してもいた．『開放性とモチベーション』は，「モチベーションの高まり」と「興味関心の広がり」を表す．学部実習生は見学実習を経て限定的だった興味関心が広がり，具体的な未来を思い描く中で自身の不足に気づき，学業や実践へのモチベーションが高まっていた．

4．【実習への具体的な意欲向上】

本CGに含まれるカテゴリーは，『実習体験の肯定的な意味づけ』と『より良い実習への思い』であった．学部実習生は実習を経て，“言葉とか単語とかで知識だけを知ってて，それでほんとに理解した気になってた部分がたぶんあると思った（回答者 H）”など，机上の知識に加えて実際に現場に入って学ぶことの意味に気づいていた．また，“この実習の内容はどれもすごく勉強になった（回答者 I）”と自身の見学実習の体験を意味あるものとして位置付けてもいた．加えて，自身の体験を踏まえて実習をより良いものにするための手立てについても考えを巡らせていた．

5．各カテゴリー間の関係性

最後に，各カテゴリー間の関係性を仮説的に示すモデルについて説明する（図 1 ）．見学実習開始時の学部実習生は，【見学実習前の非専門家としての知識やイメージ】を抱いた状態である．見学実習を通じて多様な【実感を伴う学び体験】を得ることで，学部実習生は心理職を含めた各職種に関する【見学実習によるイメージの深まり】を体験する．見学実習を通じて生じるイメージの変化は，学部実習生自身の『自己内省』を深めるだけでなく『職業アイデンティティの模索』を促進し，その結果学部実習生の『開放性とモチベーション』が高まっていると思われた．また学部実習生は，見学実習体験を振り返る中で，『実習体験の肯定的な意味づけ』を行う一方，『より良い実習への思い』を抱くに至っていた．学部実習生のこの『より良い実習への思い』が見学実習プログラムへのフィードバックとして機能した場合，次年度以降の実習プログラムの改善にも寄与し得ると思われた．

考察

岩壁ら[16]が紹介しているRonnestadとSkovholtの臨床家の6期発達モデルに基づくと，学部生は「素人援助者期」，ないし「素人援助者期」から「初学者期」への移行期にあたると思われる．本研究においては，そのような専門教育の極めて初期段階に位置すると思われる学部実習生が，大学病院精神科における見学実習でどのような学び体験を得ているのかについて検討を行った．

学部実習生は【見学実習前の非専門家としての知識やイメージ】を抱いて見学実習への参加を開始していた．実習開始時の医療領域に対する興味関心は必ずしも高くなく，医療領域や精神科医療に対しては個人的な経験に基づいた非専門家としてのイメージを持っており，精神科医療に対してはネガティブなイメージを抱いてさえいた．見学実習を通じて，学部実習生は現場を目の当たりにすることで多くの【実感を伴う学び体験】を得ていた．見学実習前に抱いていた医療現場 や医療領域で働く様々な職種，そして多職種連携に対する事前のイメージと現実との差を体感的に学ぶことにより【見学実習によるイメージの深まり】を体験し，それと同時に自分を顧みたり自分が心理職として働く具体的なイメージを描けるようになるような【自己理解の深化と発展】も体験していた．また，実際の現場に入り学ぶことの意味に気づき，【実習への具体的な意欲向上】も見られていた．以下，上記について心理職，精神科医療，他職種と連携という観点から述べる．

1．心理職についての学び

心理職に対する学部実習生のイメージは，見学実習前は“カウンセリングとかやってる（回答者 G）”，“すごいフレンドリーで明るい（回答者 J）”といった漠然としたものにとどまっており，医療領域における心理職についての知識も乏しかった．見学実習を通じて，学部実習生は大学病院という特性からカウンセリングよりも診断のための心理査定の依頼が多いことに驚き，領域や各職場によって心理職の仕事内容が異なることへの気づきを得ていた．また，非常に多くの心理検査用具や用紙が備えられている室内

の様子を目の当たりにすることで，施行される心理検査の件数の多さと種類の幅広さについても実感していた．心理職の講義を通じて実際に患者と向き合う際の具体的な考慮点について理解を深めると共に，心理職と患者と実際に接している場面を目にする機会によって，心理職が患者に対してただ“フレンドリー（回答者 J）”ではなく“ちゃんとした距離感を持って接している（回答者 J）”ことにも驚きを感じており，患者と自分との間に“一線を保ちながら接していく（回答者 G）”ようなスキルの必要性にも気づいていた．このような体験を通じ，“自分がもし検査をする側になったら（回答者 F）”と心理職として働く自分を具体的にイメージしながら考えることができるようになり，自分が興味ある分野の心理学を学ぶことだけでなく，様々な分野の心理学や多職種の職務についても興味関心が広がり，モチベーションも向上していた．そして，このような見学実習の体験を自身の心理職を目指すアイデンティティの中で肯定的に捉え，見学実習に対しても更なる意欲を持つに至っていた．

2．精神科医療についての学び

精神科医療の見学においては，驚きという強い感情を伴うものが多く見られており，自身の体験に基づくイメージとの差が大きかったことがうかがえた．見学実習を通じて医師や看護師，病院という現場のイメージはより具体化し，精神科医療に対する偏見の低減にもつながっていた．看護教育においても，実践的な内容を含む参加型の精神科実習を通じて精神障がい者への偏見が低減することが示されている[17]が，実践的な内容を含まない見学実習であっても偏見の低減が生じているのは興味深い．偏見の低減には他者視点取得が影響するとされており[18]，認知症のスティグマに関する研究では「もし自分が認知症になったら」という仮想的な問いはスティグマの低減に影響しない一方で，知識と対面経験がスティグマ

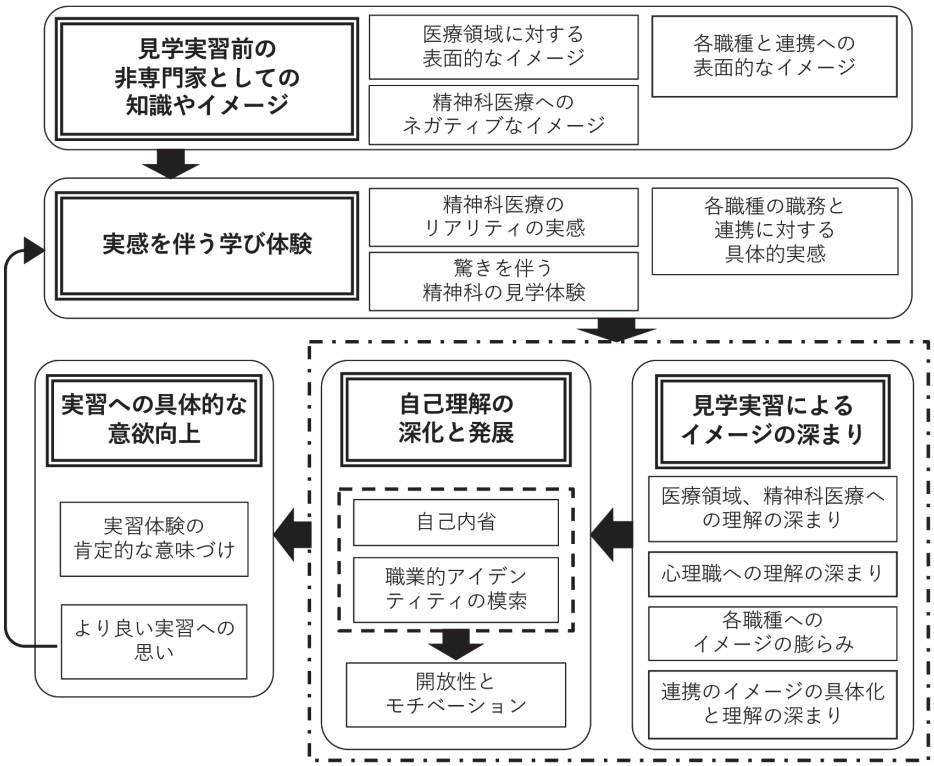

図１．カテゴリー・グループとカテゴリーを用いた実習による学び体験の仮説モデル（二重四角はカテゴリーグループを，単線四角はカテゴリーを表す）
Hypothetical model of learning experience through observational practice using category groups and categories. Double squares represent category groups, single line squares represent categories. The trainees began with “knowledge and image as a non-professional prior to the off-campus trips” as the trainees had a non-professional image of the medical field and psychiatry based on their personal experiences, and/or had a negative image of psychiatry. Through the off-campus observations, the trainees underwent many "learning experiences with a sense of reality.” Then, the trainees experienced a “deepening of images through observation practice." At the same time, they were able to reflect and develop a concrete image of their own work as psychologists (“deepening and development of self-understanding”) . Lastly, they were exposed to actual workplace experience and gained concrete improvements in their motivation for practical training.

低減に有効であることが示されている[19]．心理職養成における見学実習は，参加型ではないが精神科患者と直接対面する経験の１つであることから，他者視点取得が促進され，偏見の低減につながった可能性が考えられる．

このように，学部実習生は精神科医療の見学実習を通じて，自身の内なる偏見に気づきを得ていた．またそれに併せて，心理検査が精神科医療の流れの中で実際に活用されている場面を見るなど，改めて精神科医療の中に心理学やその実践が位置づけられることで，医療領域だけでなく心理学的な知識についても不足を実感し，心理検査の有用性の再認識，モチベーションの向上などが見られた．

３．他職種と連携についての学び

連携については，見学実習前は“話し合ったりするんだろうな（回答者 I）”といった非常に漠然としたイメージを抱いていた．見学実習を通じ，実際に多くの連携が行われていることに驚くと共に，医療現場が多くの職種による役割分担で成り立っていることを理解し，心理職だけでなく他職種のことを知ることについても必要性を感じるようになっていた．一方で，他職種のことを知る中で心理職と他職種の職務の重なりにも気づき，心理職という仕事の独自性について当惑を感じながらも自分なりに模索しようともしていた．臨床家の職業発達の促進要因として，割澤[20]は「自己理解を深めること」，「主体的に感じ考えること」，「知識の獲得と主体的に感じ考えることを両立すること」等を挙げている．学部実習生は見学実習を通じ，知識を獲得し他者イメージの変化を体験するだけでなく，自己理解を深め主体的にアイデンティティを模索する体験も得ていた．

このように，学部実習生は見学実習当初は精神科医療に対してネガティブなイメージを抱きつつも，見学実習による【実感を伴う学び体験】を通じて【見学実習によるイメージの深まり】と【自己理解の深化と発展】を体験していた．また，見学実習体験を自身の心理職を目指すアイデンティティの中で肯定的に捉え，主体的に考える体験を得ると同時に更なる見学実習への意欲を持つに至っていた．

臨床心理士養成過程における大学院生の教育臨床領域での実習体験の分析[1]では，適応指導教室における実践的な実習を通じて，「場の理解」，「子ども理解の広がりと深まり」，「臨床心理学的援助の実際」，「臨床心理士の専門性」について体験的な理解を深めていることが示されており，やはり大学院における実習での学び体験は臨床実践についての体験的学びが主となっているようである．それに対して，公認心理師養成課程における学部生の医療領域での見学実習による体験は，友清[1]らのカテゴリーで捉えるならば「場の理解」が主となるように思われる．加えて，「連携」や「チームアプローチ」が重視されている公認心理師養成課程においては，心理職の「専門性」についての学びも心理職からの学びだけでなく，他職種を知る中でそれらとの対比からももたらされていたことは一つの特徴と言える．

以上のことから，公認心理師養成課程における見学実習においては，学部実習生が実感を伴う見学体験を経て自己内省や職業アイデンティティの模索に至り，開放性やモチベーションを高められるよう，実習担当教員及び実習指導者が指導・支援することが有用であろう．加えて，見学内容の理解だけでなく自己理解の深化が生じているかどうかという点は，学部実習生の見学実習の達成状況や課題を評価する際にも重要な視点になると思われる．また，職業アイデンティティの模索が生じることを踏まえると，例えば事前指導や事後指導において実習先の領域に関する知識について学ぶだけでなく，心理職のコンピテンシーや職業発達段階についての学びをプログラムとして取り入れることで，職業発達という視点から学部実習生の自己理解を支援できるであろう．さらに，様々な領域における心理職について学ぶことに加え，様々な領域における他職種についても学ぶ機会をプログラムに取り入れることによって，他職種との対比から心理職の専門性についてさらに理解を深めることもできると思われる．なお，今回医療領域の中でも精神科医療という領域における見学実習を行ったことにより，学部実習生が自身の内なる偏見に気づくという貴重な体験をもたらしたことも示された．意識されていなかった偏見に気づくことに加え，現場を見学し精神科患者と直接対面することによって偏見が低減するという経験は，心理職として対人支援に従事していくにあたって非常に有意義な学び体験であると言える．したがって実習プログラムの作成にあたっては，精神科医療等における見学実習を取り入れることで当事者と直接対面する機会を提供し，学部実習生が偏見への気づきだけでなく低減まで体験できるよう指導・支援することも有用と思われる．

一方，見学実習は，学部実習生が曖昧ながら思い描いていた心理職のイメージと現実とのギャップに直面する機会ともなることも示された．職業的アイデンティティの揺らぎを感じる場合，このプロセスは学部実習生にとって一種の「危機」ともなり得る．

今回のデータでは分析，検討は行っていないものの，例えば実習の結果として学部実習生が経験への開放性やモチベーションの低下に陥る可能性や，心理職の道に進まず新しい進路を検討する可能性も考えられる．実践を伴わない見学実習であっても，学部実習生のアイデンティティに影響を与える体験となる可能性を考慮すると，実習元となる学部・大学院の実習担当教員と実習施設の実習指導者が綿密に連携し，実習を通じて職業的アイデンティティの危機に陥る可能性も念頭におき，学部実習生のキャリア形成のサポート体制を整えることは非常に重要であろう．また，実習生が抱いている『より良い実習への思い』は，実習担当教員や実習指導者にとって，今後の実習実践を更に質の高いものにしていくために有用なフィードバックともなり得る．この点に関しても，実習担当教員と実習指導者の綿密な連携によって，事前指導や事後指導を含めた実習実践に役立てていくことが必要と思われた．

最後に，本研究の限界と今後の課題について述べる．今回の調査と検討は，大学病院の精神科実習という非常に限られた少数を対象とした探索的な試みである．また，実習指導者がインタビュアーを兼ねているという構造的な限界があり，そのことが学部実習生の発言に影響を与えた可能性もある．加えて，インタビュー手法としてFGIを選択したことにより，個別のインタビューと比べると一人当たりの発言時間は限られたものとなった．また，参加者が他の参加者に遠慮して発言を控えてしまったり，発言が表層的なものにとどまったりした可能性もある．特に，本研究では対象者が同じ学部の学生であったことから，日常的な人間関係が今回のインタビューでの発言に抑制的な影響を与えた可能性も考えられる．今後さらに，精神科医療以外の医療領域や，医療以外の領域について，複数の大学を含めたさまざまな実習に関し，インタビュアーが実習担当者を兼ねない学び体験のデータや個別インタビューによって得られたデータも追加していくことでカテゴリーをさらに洗練させ，他領域との比較を通じた検討も重ねていく必要があると思われる．

結論

公認心理師養成課程における学部実習生が，医療領域の見学実習においてどのような学び体験を得ているかを明らかにすることを目的として、本研究を行った．その結果、学部実習生は見学実習を契機に自分自身についても内省を深め，職業的アイデンティティの模索も開始しており、職業発達を促すような重要な学び体験となっていることが示された．

見学内容の理解だけでなく自己理解の深化が生じているかどうかという点は，学部実習生の達成状況や課題を評価する際にも有用な視点になる．また，実習担当教員と実習指導者は，指導を通じて学部実習生の職業発達をさらに促すだけでなく，職業的アイデンティティの危機にも対応できるようなサポート体制を整えることも重要である．

利益相反

本研究に関して開示すべき利益相反はない．

謝辞

稿を終えるにあたり，調査にご協力頂いた学部実習生の方々に深く感謝を申し上げます．また，学生教育にご協力頂いた鹿児島大学医歯学総合研究科精神機能病学分野の先生方，ならびに鹿児島大学病院臨床心理室の先生方に，この場を借りて御礼申し上げます．

文献

1）友清由希子，岩橋知子．院生は学外の臨床心理実習で何を学んでいるか．福岡教育大学紀要2008；57：63-70.
2）野中舞子，石橋太加志．教育領域における心理実習生の気づきの変化 心理教育授業実践を中心に．日本教育心理学会総会発表論文集2021；63：383.
3）仲沙織．臨床心理士養成大学院における学外実習の現状について：医療領域のアウトリーチの視点から課題を探る．鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科紀要2018；13：3-11.
4）日本心理臨床学会職能委員会．第2部これからの臨床心理実習：現状と課題．心理臨床学研究2001；19：47-64.
5）国立精神神経医療研究センター．公認心理師の養成や資質向上に向けた実習に関する調査：厚生労働省令和元年度障害者総合福祉推進事業．東京：国立精神・神経医療研究センター，2020.
6）松原由枝．臨床心理学実習が学生に及ぼした成長要因．川村学園女子大学研究紀要2004；15：43-54.
7）波田野茂幸．放送大学における公認心理師養成に向けた「心理実習」の検討．放送大学研究年報2019；37：31-43.
8）岩山孝幸．心理実習に求められる学びのあり方について―公認心理師カリキュラム等検討会・ワーキングチームの議論をもとに―．昭和女子大学生活心理研究所紀要2021；23：115-122.
9）ヴォーン, S., シューム, J. S. & シグナム, J. 井下修（監訳), 田部井潤, 柴原宣幸(訳)．グループ・インタビュー

の技法．東京：慶應義塾大学出版会，1999：153-163.
10）松岡宏明，中瀬克己，発坂耕治，金子典代，横山美江．研修医へ効果的な地域医療・医療研修を提供するための質的研究．日本公衆衛生雑誌2006；53：715-720.
11）齋藤雪絵，村中陽子．臨地実習における看護学生のメタ認知的活動が発達するプロセス．日本看護医療学会雑誌2019；21：14-22.
12）戈木クレイグヒル滋子．質的研究方法ゼミナール第２版 グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ．東京：医学書院，2008：71-88.
13）山本渉．担任教師にスクールカウンセラーとの協働の開始を促す状況―グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成―．教育心理学研究2012；60：28-47.
14）平田祐太朗．小学校における発達障害児童の保護者と担任教師の協働を支えるスクールカウンセラーのアプローチ―グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成―．教育心理学研究2015；63：48-62.
15）川喜田二郎. 発想法 改版－創造性開発のために. 東京：中公新書，2017：83-97.
16）岩壁茂，金沢吉展，村瀬嘉代子．Ⅰ 公認心理師の職責 日本心理研修センター監修．公認心理師現任者講習会テキスト2018年版．東京：金剛出版，2018：4-43.
17）小坂やす子，文鐘聲．精神看護学実習前後における学生の状態不安・特性不安と偏見の関連．太成学院大学紀要2012；14：63-68.
18）吉住隆弘．生活保護受給者への偏見に関連する心理学的要因の検討．パーソナリティ研究2019；27：249-251.
19）石附敬，阿部哲也．認知症スティグマの低減に資する要因群の探索―大学生を対象にした試行調査を基に―．東北福祉大学研究紀要2017；41：133-143.
20）割澤靖子．心理援助職の成長過程―ためらいの成熟論．東京：金剛出版，2017：56-60.